

まちネット会議録

日時：平成19年2月28日（水） 18：30～20：40

場所：市立公民館3階講座室4

参加者：39名 司会：中村、記録：下村

ゲストスピーカー：月山 渉さん（熊野古道案内人）



月山 渉さんのプロフィールと今回のテーマ

熊野古道とは、熊野と各地を結ぶ熊野詣の道の総称で、「熊野街道」とも呼ばれます。

京都から紀伊の海岸線を通して熊野に至る道は「紀伊路」と呼ばれ、平安時代から上皇、貴族を始め、多くの旅人がこの岸和田を通り、熊野へお参りに行きました。岸和田にも、現在のJR久米田駅近くに「池田王子」がありましたが、現在では、当時の姿を伝えるものは何もありません。

旧道研究家の月山さんは、熊野古道の案内人です。中学校教師を退職後は、公民館や歴史クラブの講師をする傍ら、熊野古道にまつわる伝承や文化、信仰についても研究されています。

当時の熊野古道、人々の生活は一体どのようなものだったのでしょうか？また岸和田唯一の王子だった池田王子とは、どのようなものだったのでしょうか？

今回のまちネットは、古（いにしえ）の時代にタイムスリップして、熊野古道と和泉国・岸和田にスポットを当てます。

1、講演の内容（お話のポイント）

＜熊野古道とは＞

- 私は熊野古道紀伊路州語り部の会に入っている。現在、会員数は45名程度で活動している。
- 海南市から田辺市までの90キロが会のエリアだが、私は大阪の天満橋から田辺までを案内している。
- 3年前に世界遺産に登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」は、非常に広範囲で、道も含めているのが特徴である。
- 熊野詣は平安時代から紀伊路、伊勢路の2ルートがあったようだ。
- 伊勢路は、船を使うことが多かったようで、伊勢路の道は江戸時代に整備された。
- 熊野詣は、紀伊路が圧倒的に多かった。そのルートは、京都鳥羽付近（京都南IC）～天満橋～四天王寺～住吉大社～田辺～中辺路～本宮～速玉～那智に至った。今回、世界遺産に登録されたのは、滝尻からの中辺路や大辺路、小辺路などである。
- 海南市の藤代峠付近は、コンクリートで舗装され、手をつけているので対象ではない。
- 伊勢路は紀州の殿様が整備させた。尾鷲などをはじめ、雨が多い地域であるため、道が崩れないように、石畳道にした。石畳道はコンクリートといっしょで、歩いていると足が痛くなる、やっぱり土道が良い。
- 大峰道は、行をするための道であり参詣道とは言えない。
- 小辺路は最短ルートだが、標高のある峠を3つ越えないといけない。これも一般的な参詣道とはいえない。



月山 渉さん
（楽しくて気さくな方でした。）

- やはり中辺路経由の道が、本来の熊野詣の参詣道である。それが私たちのまちである岸和田を通っているのである。
- 1,000 年以上の歴史がある古道なので、もっと注目して欲しい。
- 池田王子跡は史跡になっているが、民家敷地となっており、何ら案内するものも無い。
- 熊野古道のブームは、一過性の流行だったかと思っていたが、去年くらいからは、関東方面からのツアーが多い。ガイドの途中、みかん畑が珍しいのか、大変喜ばれた。
- 熊野古道のガイド養成に和歌山県が力を入れている。昨年全 12 回の語り部養成講座を開催。50 人以上の申し込みがあった。その殆んどの人が、語り部の会への入会を希望してくれた。
- 海南市や中辺路などでガイドできる人は多いが、通して案内できる人は少ない。
- 昔はイイところ取りで、人気の区間だけを歩きたいという要望が多かった。でも今は、熊野古道のすべてを歩きつなぎたいという人が多く、それに対応できるガイド依頼が増えている。
- 近頃は、大阪でも小栗街道を歩く人が多くなった。

<王子とは>

- 王子とは何かという質問をよく受ける。大阪府下など、王子の場所すら明確でない。伝承として伝わっているだけで、不確かなことが多い。
- 王子にまつわる説が幾つかある。
 - ・ 熊野権現の分祀で、本山の御子神、つまり皇子、それが王子になったという説。
 - ・ 荒霊（あらみたま）の性格、鎮めないといけない。これを祀ったものが王子という説。
 - ・ 行者の守護仏の金剛童子が王子になったという説。
 - ・ 道筋の森などに祀られた土地の神様が王子となったという説など。
- 日本人の原初的な考えとして、人が亡くなれば魂が山、海へ行くと考えていた。
- 海のかなたの常世の国を拝しながら海岸を巡って歩く、辺地信仰と呼ばれる海の修験者たちがいた。
- 辺地信仰が、山（内陸部）に入って、中辺路と呼ばれ、それが熊野信仰へと発展したという説がある。
- 紀伊路・中辺路に集中的にある王子、その数約 100、それらの王子をまとめて「熊野九十九王子」と呼ぶ。九十九という数字は実際の数ではなく、大変多いという意味で使われている。



<小栗街道について>

- この道は、小栗判官に由来し、物語の主人公の名がついた全国的にも珍しい道である。
- 小栗判官とは、1400年代前半に常陸の国に実在した小栗助重又は満重（助重の父）がモデルとなっている。
- 小栗氏は、地方の弱小豪族で、関東の権力者足利氏と戦った武士であった。
- 最終的に小栗氏は滅亡してしまうが、日本人は、判官びいきという言葉があるように、強者に抵抗する者を応援してしまう気持ちがあったようだ。
- 小栗氏の霊魂を慰撫するために伝説を作ったのではないかと考えられる。

- その伝説を広めまわったのが、時宗の聖らだが、開祖一遍上人は熊野に詣っている。時宗は熊野権現を尊崇し、時宗と熊野は切っても切れない縁がある。熊野権現の勧進活動の中で、小栗の物語を全国に広めたのではないか。
- 熊野は当時のハンセン病患者の最後の頼みの神だった。「餓鬼阿弥」といわれた小栗判官のイメージは、明らかに当時のもハンセン病患者だった。
- 説教「小栗判官」のあらすじ
- 小栗判官の物語がすごく有名になった。その物語を語ったのは、説経師といわれる人達。説経師はササウという楽器を手にし、それを擦りあわせて音を鳴らしながら物語を語っていた。
- 説経師は、全国各地でその土地土地の神仏にちなんだ物語を語ったので、話しが全国各地で変わっている。
- 岸和田の下松轟橋は、小栗が橋を渡ろうとした時、土車が川に落ちかけて、車が一つ外れたことから、轟橋と呼ばれるようになったと伝えられている。

<熊野古道について>

- 古代の南海道を踏襲したのが、熊野古道。
- 熊野古道は上町断層の丘陵の末端（標高20～30m）を通っている。昔はこの道筋が非常に賑わっていた。その後時代によってルートが変わっている。
- 近世になり、道が山手から浜手に下りてきた。
- 「歴史の道調査報告書（大阪府教委）」によると、熊野古道の呼称について、熊野大道（クノオミチ）、そして後、小栗街道（オグリカド）と呼ばれていた。
- 実際のところ、大阪では熊野街道と呼ばれたことはなかった（和歌山県下では、江戸時代にそう呼ばれていた）。
- 元々、熊野詣は上皇、貴族が行っていたが、承久の乱後、その主体が庶民や武士に変わってくる。それに伴い、賑わいの変化が起こり、道も変わってきた。岸和田では、古くには箕土路、下池田、小松里を通り、現在の八木北小学校を通過していたと考えられる。
- 小栗街道とは、厳密に言って堺から泉佐野までの区間のことである。



<世界遺産について>

- 世界遺産には、自然遺産（環境省）と文化遺産（文化庁）の2種類がある。
- 世界遺産になるためには、暫定リストに入ることが前提で、その中からユネスコで審査される。
- 暫定リストに入るためには、他のものとの違いをださないとけない状態になっている。
- しかし、世界遺産に登録されると観光客が増え、週末には観光バスで渋滞、観光客のごみの散らかしなど地域では様々な問題が起こっており、反対運動も発生している。
- 世界遺産登録については、十分に考えないとけない。登録されると、景観を保護するために道から50メートル以内は、規制対象となって勝手に手を加えることができない。地元が迷惑している。
- 世界遺産に登録されることが、本当に良いことなのか。

- 文化審議会の西村氏（東京大学）は「世界遺産は観光資源ではない。スーパー国宝に見るのは、問題ではないか。本来は危機に瀕しているものを保護するのが目的である」と言っている。

<まちづくりについて>

- 大阪市の平野のまちはすごく活気がある。平野のまちは戦災も受けておらず、古いまち並みを残している。まちのスゴロクマップをつくり、まちの魅力発見を行っている。
- 平野の人々は「現代の環濠」と言って、自分たちのまちは自分たちで守るという強い信念を持っている。
- 地域の人たちが、地域のこと・まちのことを勉強することが必要。まちに問題が起こった時に、いつでも意見を言えるように勉強しておくことが大事。地域力が問われている。
- 土生神社では、「郷土の歴史を学び勉強する会」を作り、地域の魅力発見のために地元の方が中心となって地図を作った。こんな取組みは素晴らしい。
- 地元に愛着をもって、もしまちに「異物」が入ってきても、すぐに反応できる体制が必要ではないか。

<質疑応答>

- 王子の管理は誰がしていたのか。
⇒先達（修験者）が道と王子の管理をしていた。御幸一行の接待は地元が行っていた。地元負担が大きかった。
- 王子の場所は誰が決めるのか。貝塚に3箇所の王子があるのに、どうして岸和田には1箇所なのか。
⇒王子の場所は先達が決める。傾向として、川を渡る手前、坂の手前など何かしら準備をするために休憩が必要なところに王子が多いように思う。



<小栗伝説あらすじ>

二条大納言の世継ぎである小栗は成人し、親がすすめる娘を妻として迎えるが、すぐに離縁してしまう。それを何回も繰り返し、とうとう72人の妻を取り替えた。

ついには常陸の国に追放されてしまう。が、そこでも豪族横山家の娘、照手姫に親の諒承もなく婿入りし、横山氏の怒りをかい、宴席で毒酒を飲まされ死んでしまう。

照手姫の方も父の怒りをかい、家を追放され、人買いの手を転々とし、美濃の国の宿で水仕女となる。

死んだ小栗は、あの世で閻魔の計らいにより「餓鬼阿弥」となってこの世に戻される。

小栗の胸には、「この者を熊野の湯に入れよ」という閻魔直筆の御判が下がっており、それを見た藤沢の上人は、小栗を土車に乗せ「この者をひとひき曳いたは千僧供養、ふたひき曳いたは万僧供養」と書き添え、車を曳き出させる。

心ある庶民は、次々と熊野に向かって曳き続ける。美濃まで来たとき、照手は主人に5日間の暇をもらい、車を曳く。もちろん小栗が「餓鬼阿弥」となって生まれ変わっていることなど知るはずもない。

土車は無事に熊野に到着し、小栗は四十九日間、本宮の湯の峰の湯に入り、元の姿に蘇る。都に戻った小栗は、その後美濃の国で照手と再会を果たす。